

男になった貝

直江津捕虜収容所事件

上坂冬子

文春文庫



文春文庫

貝になった男 直江津捕虜収容所事件

定価はカバーに
表示してあります

1989年8月10日 第1刷

著 者 上坂冬子

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-729806-6

文 春 文 庫

男 になつた 貝

直江津捕虜収容所事件

上 坂 冬 子



文 藝 春 秋

貝になった男／目次

プロローグ

9

足をもがれた少女

18

遺族たち

27

最後の民謡

39

河原の枯れすすき

48

チリ紙のてるてる坊主

59

三十五年目の便り

68

戦犯裁判

81

証言台にて

97

捕虜をかばった人

124

所長の記録

135

戦争後遺症

153

オーストラリアの捕虜たち

163

軍事郵便のプロポーズ

173

貝になった男

186

あとがき

198

解説 石川チエコ

203

単行本

昭和61年8月文藝春秋刊

貝になった男

—直江津捕虜収容所事件—

プロローグ

汽車弁の夕食をすませると、すでに八時をまわっている。直江津に着いて駅の真正面にある宿に駆け込み、一風呂浴びたら今夜はすぐ寝ようと私は考えた。重いテーマをかかえた旅のせいか何時いつになく疲れて気持ちが悪く落ち着かない。時は昭和五十五年の、たしか晩春であった。上越新幹線はまだ開通していない。夕方の汽車で上野を発たって高崎を過ぎた頃、美しく空を染めて日が沈んだのを覚えている。紫と赤の絵の具をまぜ、ため息を吹っ掛けて曇らせたようなその色を見ながら、私は不安と沈滞と、そして期待をまぜあわせた複雑な思いで汽車に揺られていた。そのとき、前方の座席から振り返るようにして私を見ている女性に気づいた。年は私と同じくらいだろうか。疲れていたせいもあって私はことさらに目をそらし、やがてうとうとと軽い眠りについたのであった。

目が覚めたのと直江津に着いたのが、ほとんど同時である。終点なので人々はゆっくりと席を立ったが、生来せっかちな私は一人あわただしく戸口にむかった。すると

「あのう」

と私を呼びとめた人がある。振りむくと、さきほどから私を見ていた女性で

「上坂冬子さんですね。直江津にはお仕事でいらっしやったのですか」

と問い掛けた言葉に少し訛りがあつた。地元の人にちがいない。とっさに私は、この年代なら、いまから調べようとしている捕虜収容所を知っているはずだ、と心ときめかせたのである。戦時中、日本の各地に捕虜収容所が設置されていた。新潟県下では、新潟、青海、直江津などにあつたが、私が特別な関心を抱いたのは直江津である。直江津捕虜収容所は東京の管轄で、正式には東京捕虜収容所第四分所という。

なぜ私が直江津に強い関心を持ったかという点、戦後、ここで働いていた日本人の中から、八人も人が戦争犯罪人として絞首刑に処されたからだ。国内の捕虜収容所としては、処刑された人の数が最も多い。いったい何があつたというのだろうか。さらにもうひとつ、八人の部下が絞首刑になったというのに収容所長は終身刑で、十二年の獄中生活を送ったあと無事に家族のもとに戻っている。陸軍中尉（ポツダム宣言受諾後に大尉）だった所長はどんな人で、なぜ生き長らえることができたのか。

いまさら究明したところで事態は変わるわけでなし、誰もが触れたくないからこそ、そっと

戦後史の片隅に埋めるようにしてきた話を、今頃になって掘りおこすことへのためらいはあったが、私には戦争が引きおこした明暗に理屈ぬきの執着がある。とりあえず現地にいつてみよう、と謎解きの旅に出かけてきたのだ。私は私と同世代に見えるというだけの親密感から列車の中のゆきずりの彼女に、だしぬけに問いかけたのであった。

「直江津に捕虜収容所があったのを、ご存じですか」

初対面にもかかわらず、彼女は人なつっこく多弁で

「捕虜収容所のことなら、よく覚えてます。わたしは女子挺身隊として、毎朝、古城橋を渡って工場に通ってましたもの。橋の上から収容所が丸見えでしたけど、先生から絶対に収容所のほうを見るな、反対側を見て歩けと言われてました。女学生と捕虜とが恋愛でもはじめたら、えらいことだと思われたんでしょう」

一気にこう語ったあと、彼女は別れぎわに私の顔を見据えるようにして付け加えたのである。「収容所に関係したことを調べにいらっしゃったのなら、私の友達のミエさんに会って話をされるといいです。戦争のあとで苦勞された人です」

語尾に「て」をつけるのは方言なのだろう。たった一文字で、いかにも物柔らかい印象になる。ミエさんはどこに住み、どんな苦勞をした人なのかと、踏み込んで聞きたいと思いつつも、私ははあと曖昧に頷いて人の流れに身をまかせて改札口に向かった。駅前のいかや旅館に心奪われていたせいである。

もう何年も前のことだが、信越化学の女子社員のための講演会に招かれて直江津に行ったことがある。そのときの宿が駅前の「いかや」という木造の品のいい旅館だったことを私は鮮明に覚えていた。手入れの行き届いた庭の木立や、磨き上げられた長い廊下などを思い出しつつ電話で問い合わせたところ、どうやら宿は健在で私はほんと救われる思いであった。もしこの旅がさしたる収穫もなく終わったとしても、あの宿で旅情を楽しむことができれば、それはそれでいいのではないかと、自分で自分を引き立てるようにして私は家を出てきたのである。

いかや旅館は以前泊まったときのままの姿であった。恐らく明治の終わり頃から、その姿を変えずにきているのではないか。正面玄関の右手の、六角形の西洋館の塔がたしか応接ロビーだったと記憶を蘇よみがえらせながら、私は列車の中で聞いた「ミエさん」の名などもはや念頭になく、宿の玄関に駆け込んだのであった。

通された十畳の座敷に香が焚たいてある。香炉は李朝りだろう。畳一枚ぶんほどの床の間に茶花が活いけてある。

「大旦那さまは九十歳ですけどお達者で、いまでも階下の茶室で教えておられます」

部屋付きのベテラン女中さんの愛想のよい語り口に心ほぐれる思いを味わいながら、私はその大旦那さまに会えば謎解きの手がかりが握つかめるかも知れないとひそかに胸算用した。さしあたって、明日は一日観光に当てるくらいの余裕をもって、慌てずに時期を待とう。女中さんは私の心をみすかしたかのように、ここで観光名所として柏崎の「ちごのや」を挙げた。

「痴娯の家」と書いて、ちごのやとよむ。地元の篤志家岩下庄司氏が収集した三万点ほどの人形や郷土玩具を並べた展示館で、この命名は児童文学者巖谷小波氏いわやさなみによるという（現在は展示内容が変わり、痴娯の家ではない）。人形にさして関心はないけれど、直江津―柏崎間なら取材のための足ならしには丁度よい距離である。明日、遅い朝飯を済ませて出かけたいからタクシーを頼んでおいてほしいと告げて、私はころがるように床についた。

「日本玩具館・痴娯の家」は米山大橋を渡った小高い丘の上にある。二階建の館内に一步踏み入れて、私はしばし息を呑むの思いであつた。展示三万点という数もさることながら、全国各地の郷土人形をくまなく集めたその執念に圧倒されたのである。東京からは出初式でぞめしきの「め組」の文字入りの水鉄砲などが選ばれていた。北海道旭川からは、こけしの名工小椋米吉氏の「米吉こけし」、岩手からは、籠かごの中の赤ん坊に乳を含ませようとして胸をはだけた母親の姿をかたちどった「えじこ」、四国の高知からは坊さんと簪かんざしをつけた町娘が相合傘に身を寄せた人形、九州長崎からは古賀人形というように、文字通り北から南まで各地に散在する有名無名の玩具や人形が、ガラスケースのなかで愛らしい表情をみせている。

展示品は日本のみならず、東南アジアの国々にも及んでいたが、やがて私は片隅のケースの中に青い目の人形があるのに気づいた。

昭和二年にアメリカの世界親善協会から、使節として一万数千体の人形が日本の小学校に送

られてきたことはよく知られている。展示されているのは、その中の二体であった。頭巾ずきんをかぶった軽装のと、毛皮つきのコートを着たのとを揃えたのは、贈り物に季節感を盛り込むためであろうか。ルースにミルドレッドと、それぞれの名を記した当時のヴィザも添えてある。日米ともにゆとりのある、よき時代をほうふつ髣髴しながら私は歩を進めていたが、次の瞬間、思いがけない衝撃に身を硬直させたのであった。青い目の人形に添えて、一通の毛筆の手紙が展示してある。

「拝啓先程御申越相成候おもしこしあいなりそうろうアメリカの俘虜二名差上げ候間 收容被下度くだされたく 御依頼申上げ候

岩下様 二月十八日

角張信隆」

二体の人形を捕虜にたとえてあるのだ。手紙の解説として

「人形愛護の鬼・岩下庄司と、豪胆鉄腸の大校長・角張信隆の間に結ばれた男と男の命がけの秘密盟約。それが日米親善・人形使節のいのちを救った証あかしである」

と記してあった。

人形愛護の鬼・岩下庄司氏は柏崎市内で明治初年からの文具店を継ぐ人であった。痴娯の家を埋めつくしてなお余りあるほどの玩具や人形はすべて岩下氏が足で集めたものである。手紙に年号は記してなかったが、直江津捕虜收容所が軌道にのった頃のものにちがいないと私は思った。日米親善使節が送られてきて、わずか十数年しかたっていないというのに国と国とが敵対して、人形は身のおきどころのない時代になっていたのである。

人形収集家の岩下庄司氏にとって、何はともあれ戦争は人形の大敵であった。岩下氏としては、各学校に配られた罪のない青い目の人形の身の上を案じつづけた末に、角張校長の許^{もと}に向いて自らその保管を名乗り出たものと思われる。

角張信隆氏は刈^{かり}羽^わ郡黒川村村長の息で、高田師範を卒業して以来もっぱら地元教育分野で活躍し、県の首席視学を経て柏崎国民学校、実業高等女学校などの校長を歴任した。日中戦争下では文部省派遣全国小学校長団に加わって満洲・支那（現中国）を視察し、『新潟県人名辞書』（昭和十六年刊）によれば、「頭脳明晰豪放磊落辣腕^{らいらくらつわん}を有し、軀幹^{くかん}長大……」とある。すでに両氏とも故人とならたいま、二人の間でどんな会話が交わされたか知る由もないが、角張校長としては立場上、人形をあわれんだり岩下氏の配慮をねぎらったりすることなど口にできない時代であった。だが、岩下氏の熱意にほだされるまでもなく、角張校長にはそれなりの理性があったものと察せられる。手紙の書き出しに「先程」とあるところから、文案を思いついたのは岩下氏が帰ってまもなくのことらしい。後を追うようにして二体の人形と、捕虜引き渡しの手紙とが岩下家に届いた。受け取った岩下氏のにやりとした表情が目に見え浮かぶ。岩下氏は明治二十二年生まれだから当時五十四歳か。角張校長は明治二十四年生まれ、日本海の寒風に鍛えられた人々が戦時下に発揮した理性と友情であった。

それにしても、青い目の人形を捕虜になぞらえたのはうまい思いつきである。何事もなければ、とっさの機転で捕虜收容所が思い浮かぶことはなからうから、小学校長が人形収集家の蔵